

『資本論』発刊、150年

労働大学 副学長 須藤 行彦

香川『資本論』研究会の発足

1867年9月14日は、ハンブルクのマイスネルという書店で、はじめて『資本論』第一巻が現われた日であるとされています。今年で150年目になります。

いま、全国的に私たちの運動（科学的社会主義を追求）は、後退、停滞状況を続け、この状況から脱出するために、活動家自身が苦悩しています。しかし、巧い手はありません。やはり、私たち自身が、この困難を突き破る力を身につける以外にありません。それは、理論です。労働者が人間らしく生きるために、闘う力とするために書か

れた『資本論』に貫かれている、マルクスの理論と思想を、労働者自身のものにすることです。

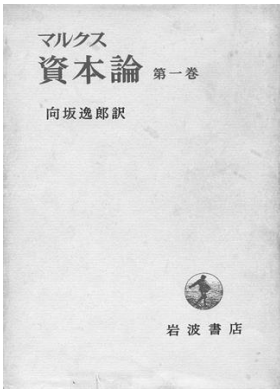
こんな思いで「香川『資本論』研究会」を07年12月4日、スタートさせました。その原動力になったのは、ある女性が大阪で開かれる『資本論』研究会に参加したい、との声があり、それでは香川でやろうということになったのです。

『社会を変える、自分を変える』『日本はどこへゆくのか』を学習し、12年1月から『資本論』原本に入り、現在は第二巻「資本の流通過程」に入っています。

きっかけは、向坂逸郎先生のサイン

私自身が、『資本論』を直接手にし、学習会を始めたのは、1967年11月28日、『資本論』100年記念講演会で、記念出版された『資本論』（岩波書店）に訳者の向坂逸郎先生からサインを頂いたのがきっかけでした。20歳でした。

その年の5月、高松で岩波主催の講演会があり、向坂逸郎先生の講演を初めて聞く機会がありました。その晩、なぜか私とKさんが下宿していた薄汚い下宿先に、向坂先生が何人かを伴って来てくれました。驚きました。その後、ハガキを頂きました。「勉強、勉



強、また勉強、勉強のみが奇跡を生むと、どこかで武者小路実篤さんが書いていました。僕もそう思います。勉強は本を読むことだけではない。一切の経験を自分の成長にかすことです。八月にはまたお目にかかれませう。七月二十八日 向坂逸郎（松本にて）というものです。このハガキは、今も大切にしています。

必ず分かる本『資本論』

記念出版の「訳者まえがき」より：
…『資本論』は、必ずしもやさしい本ではない。しかし、額に汗して働く

人々には、必ず分かる本である。いわば、彼ら自身の自伝であるからである。私は、私や私の同志とともに永年にわたって『資本論』の学習に力め、これを実践に生かし、いかなる抑圧にも耐えて、数々の成果を収め、いまだかつてない強力な労働組合をつくり上げた三池炭鉱労働組合労働者とその主婦会の皆さんに、この書を捧げる。「学問に坦々たる大道はない。ただ、学問の急峻な山路をよじ登るのに疲労困憊えんぱをいとわない者だけが、輝かしい絶頂をきわめる希望をもちうる」というマルクスの言葉を、最後に書き記しておく。

歴史の担い手は、労働者階級

歴史をつくるのは、人間です。しかし、これは、いついかなるところでも人間が勝手に歴史をつくることができるといえるものではありません。一定の条件のもとでのみ、歴史がつくられるといえるのです。だから、人間の歴史には、発展の法則があるということですが、この法則に添ってのみ、歴史がつくられるのです。

『資本論』は、資本主義がどのような社会に発展する条件をつくり出すか資本主義の経済的運動法則を明らかにすることによって、社会主義への必然性を証明したのです。

私は、19歳の時、三池炭鉱労働組合20周年記念集會に参加しました。夜の交流会で、三池の一人の労働者の「労働者として生きることに誇りをもっている」という言葉に感動しました。まさに、労働者階級が歴史を進める担い手であるという確信です。大切なことは、自らがたたかいたの中に身を置き、学習と相互討論の日常的な積み重ねです。亀の一步一步です。理論と実践の統一にむけて、まずは『資本論』のペー지를めくってみましょう。

（すどう ゆきひこ）